

アマゾンの愛

— ツヴェターエワの「女友だち」試論 —

中 尾 泰 子

序

マリナ・ツヴェターエワが、ソフィヤ・パルノーク（1885-1933）に捧げた連作詩「女友だち」(1914-1915) は、その当時は出版されることはなく、この詩で歌われた二人の関係に研究者が気がつくまで60年を要した作品である。その研究者、ソフィヤ・ポリャコーワによって、この作品の伝記的な背景が広く知られるようになり、一字一句それぞれを嘗めるように解釈されている。この連作詩の背後にある二人の女の伝記的な事実——つまり、1914年の10月に彼女たちが恋に落ちた時、ツヴェターエワが22歳で、パルノークが29歳であったことや、パルノークは短い結婚生活を解消してから5年を経ていたこと、そして男性名のペンネームで批評記事を書いていたことなどが、今ではこの詩を読む際に欠かせない予備知識となってしまっているのである。

一方、ダイアナ・バージンは、フランスのデカダン派の作家はレズビアニズムをブルジョアジーに衝撃を与えるための道具として用いた、と主張している。そして、このようなフランス文学の型にはまった「古典的レズビアニズム」が、ツヴェターエワの生涯において一定の時期に限られていることから、ツヴェターエワは本当は(傍点強調は筆者)レズビアンではなく、単にその役割を演じていただけであり、フランスのデカダン派と同様に、デカダンスのイメージを自覚的に、かつ反抗的に発展させていたに過ぎないとしている⁽¹⁾。しかし、ジュディス・バトラーの言を借りて、ジェンダーは「起源」をもつものではなく、反復されるパフォーマンスによって作りだされるものなのだとすれば⁽²⁾、「女友だち」を解釈するにあたって、ツヴェターエワが「真の」レズビアンであったかどうかは、全く問題にならない。仮にツヴェターエワにとって、レズビアニズムが「強制的異性愛社会」に揺さぶりをかけるための戦略であったとすれば、「女友だち」において重要なのは、レズビアニズムの言語による模倣であり、レズビアニズムがツヴェターエワの言語によっ

て、いかに構成されているかということである。「真の」レズビアンとは何か、という本質論は、ここでは避けたいと思う。いずれにせよ、男性と結婚し、夫との間に三人の子供をもうけたツヴェターエワをレズビアンと呼べるかどうかは疑問であるが、それも後で論じることにした。

I 「女友だち」

そもそも、レズビアン文学とはいかなるものであろうか。作者がレズビアンである作品か、それともレズビアンを主人公にした作品をそう呼ぶのか。最終的には、レズビアン文学とは読者の読みが決定するものだと筆者は考える。そして、「レズビアン文学」とされているものは、ある意味でアカデミズムが規定している作品なのであり、誤解を恐れずに言えば、絶えず読む者のレズビアニズムに対する「覗き趣味」に晒されているテキストだと言えるのである。本論で取り上げる「女友だち」のように伝記的な事実が知られているような場合はなおさらである。また、研究者が異性愛を揺るがすものとしてレズビアニズムを認識しようとも同じことだ。そうした意味では、17篇から成る「女友だち」の一連のテキストは読者のあからさまな「期待」に沿うものと、その「期待」を裏切るようなものが交互に並べられている。まず、第1篇をみてみよう。

1

あなたは幸福なのか？——言わないのか！ そんなことはない！
でもそのほうがましだ——それならそれで構わない！
あなたはあまりに多くの人とキスをしたようだ
そのための憂い

シェイクスピアの悲劇のすべてのヒロインたちを
私はあなたの内に見る
若き悲劇の夫人であるあなたを
誰も助けなかった！

愛の叙唱を繰り返すことに
あなたはひどく疲れてしまった！
血の気のない手の鉄の棒が——
雄弁に語る！

私はあなたを愛する——雷雲のように
あなたの頭上に——罪が——
あなたが嘲笑的で辛辣で
他の誰よりも素晴らしいから

道の闇の中で
私たちは 私たちの人生は——異なるから
あなたの靈感に満ちた誘惑と
暗い運命ゆえに

あなたに 額の高い悪魔に
私が別れを告げるから
あなたは救われないから！
——たとえ墓の上であっても！——

この震えゆえに ——本当に
私は夢を見ているからなのか？——
この皮肉な魅惑ゆえに
あなたが——彼ではないという

1914年10月16日

従来の恋愛詩における「私」－「あなた」関係を破壊することから、「女友だち」は始まっている。この詩は一見、「私」から「あなた」へ愛を語りかける古典的な恋愛詩の形式を取っている。だが、第2聯に「シェイクスピアの悲劇のすべてのヒロインたちを／私はあなたの内に見る」とあり、読者に疑問を抱かせる。この「あなた」とは女性なのだろうか、と。読者の疑問に決定的な解答を与えるのは最終行だ。「この皮肉な魅惑ゆえに／あなたが——彼ではないという」。ここには、恋愛詩のコンヴェンションをくつがえそうとするはっきりとした意図が感じられる。「私」－「あなた」コードの恋愛詩において、「あなた」と呼びかけられる者は当たり前のように「私」の異性とされてきた。しかし、ここでは「あなた」は「皮肉」なことに「彼」ではない。この一文を最終行に置くことによって、コンヴェンションに対する打撃は強度を増している。しかしまた、これは読者が抱く「レズビアン」テキストに対する期待を意識し、ある意味でそれを満たすための一文でもあろう。さらに、このテキストでは女性の女性に対する欲望が言説化されている。今後も

言及される「あなた」の「手」や「額」の描写は、女性による女性の身体の描写であるが、言葉によってのみ構築された恋人に何とかして身体を与えようとすることは、恋愛詩においてはセクシュアルな欲望の現れである。また、レズビアンステレオタイプという面からも、「女友だち」におけるパルノークの描写は考察する必要があるのだが、それは後述することにした。そして、従来の恋愛詩においては女性の魅力とみなされなかった「嘲笑的で辛辣」な性格もここでは「私」の欲望の対象であり（「私はあなたを愛する」）、賛美されている（「他の誰よりも素晴らしいから」）。

しかし、この第1篇に続く第2篇は、この詩のみを読んだ場合、この詩における「私」がレズビアンであるかどうかは読者には分からない。（ただし、動詞の過去形などから判断して「私」は女性である。第3篇でも同様である。）ツヴェターエワが意図的に隠蔽していたように感じられる。ここでは、闘争の場としての恋愛が描かれている。それは、読者にとって馴染み深い「異性愛関係」の一つのモデルでもある。

ピロードの肩掛けの愛撫を受けて
昨日の夢を呼び戻す
あれは何だったのか？——誰の勝利か？——
誰が負かされたのか？

（中略）

それでもやはり——あれは一体何だったのか？
何をかくも望み悲しむのか？
結局は分らない 勝ったのか？
負かされたのか？

さらに第3篇の一部も引用してみよう。

今日 雪がとけた 今日
私は窓辺に立ちつくした
まなざしは正気に 心は自由に
ふたたび平静になった

（中略）

忘却の快い芸術を
魂はすでに覚えてしまった

何か大きな感情が
今日 魂の中でとけようとしていた

露骨なレズビアニズムの痕跡を見い出せないこと——このことは第3篇、第4篇にも当てはまることである。現に、研究者たちもこれらの詩についてはほとんど触れようとしていない。彼らのレズビアニズムに対する「好奇心」を何ら満足させるものではないからだ。「女友だち」は、レズビアン的読みを可能にするテキスト（第1、5、7、9、10、16篇）とそうでないテキストから成り立っているが、これはツヴェターエワが意識的にしたことだと思われる。そもそも、「私」－「あなた」関係すら、第2篇、第3篇では成立していないのだ。いや、恋愛に関する詩である以上、作品の背後では成立しているに違いない。ただ、この二つの詩の中では、ツヴェターエワは「あなた」の存在を排除している。それでは、ここで打ち立てられた主体「私」をどのように解釈すべきであろうか。

「女友だち」は一篇ごとに、詳細な日付が記されているが、その日付が実際に作品が書かれた日付と一致するかどうかは別として、時間の流れに沿っていることは確かである。特に、第2、3、4、5篇に付された日付は、10月23日から26日まで連続しており、それはまるで日記のようである。そこで、レズビアニズムと自己保存装置としての日記との関係を考察してみたい。日記と同じく自己保存装置である自伝におけるレズビアニズムに関しては、すでにリー・ギルモアが論じている。彼女はその著書において、ガートルード・スタインを取り上げ、レズビアンの表象と自伝の言説について考察している。そして、スタインが自伝において、レズビアン主体がものを見ることができ、かつ見られることができる（可視である）場を根気強く作り上げている、と述べている⁽³⁾。「女友だち」の第2篇、第3篇に現れた「私」は、同性の恋人との関係性の中に置かれたレズビアンではない。読者は第1篇を読んでいるからこそ、「私」が単独で現れても、極めて日記的な独白をしていても、この「私」をレズビアンとして認識するだろう。読者の側からすれば、「女友だち」の日記にも似た連続性の中で、レズビアニズムは明らかに可視のものとなったのである。ここでは、レズビアニズムを前面に押し出した物語的な第1篇の直後に、これといった物語を持たない日記的な独白を配置することによって、「私」が読者によって性化されていく過程を観察することができる。第2篇、第3篇は「レズビアンの独白」として読まれていくことになるのである。セクシュアリティが言語によって構築されていく様が見て取れる。

第5篇では、女同士の三角関係が描かれている。その前半部分を引用してみよう。

今日 七時過ぎに
ポリショイ・ルビャンカをまっしぐらに
弾丸のように 雪のかたまりのように
櫓がどこかへ走って行った

すでに甲高く響いた笑い声……
とうとう私は視線に凍りついた
髪は赤茶けた毛皮のよう
隣には——背の高い誰かが！

あなたはもう別の女と一緒にだった
彼女とともに櫓の道が開かれようとしていた
待ち望んでいた愛する人とともに——
私よりも強く——待ち望んでいた人と

第1篇からふたたび、レズビアニズムの色彩を強めた一篇である。しかもここで、二人の女たちの関係にさらにもう一人の女が加えられたことで、完全に男は排除されていく。父権制下で「同性愛の男ふたりと異性愛の女性ひとりというクィア三人組スリーサムが、西欧の小説のなかでのある種種の原基としても機能している」⁽⁴⁾ということも考え合わせると、同性愛の女のみのみのクィアな三人組は20世紀初頭のロシアにおいても、人々を驚愕させるに足るセクシュアリティだったに違いないと考えてしまうが、現実はそのようでもなさそうである。そもそも、レズビアニズムはホモセクシュアリティほど関心を引くものではなく、ロシアでは特にその傾向が強かったとされている⁽⁵⁾。ミソジニー（女性嫌悪）とホモフォビアが、ホモソーシャル体制を支える二大原理であるとするならば⁽⁶⁾、そのどちらにも抵触しないレズビアニズムはいわば「野放し」にされていたのだろう。それにしても、レズビアン・トライアングルは、「男性嫌悪」という、ホモソーシャル体制下では真面目に語られることもなく、不可視にされてきたものをテキストの裂け目からのぞかせるのに、最も適した場であると言うことはできる。さらに、ツヴェターエフは次のような言い回しを使って、「あなた」＝パルノークを描写している。「女の優しさ 少年の大胆さ」(第9篇)、「女でもなく少年でもなく／けれども私より強い何か」(第10篇)。なぜ、ツヴェターエフは「男」とは言わずに「少年」と言うのか。パルノークが自分より年上であることを強調するような詩を書いておきながら、「少年」という言葉を用いて

いるのはなぜなのか。ツヴェターエワは、「少年」には美的価値を認めながらも、「男」には認めていないのである。やはり、ここにも一種の「男性嫌悪」を読み取ることができる。

日記的な独白の第6篇に続き、第7篇では恋愛の絶頂期が陶醉するようなスタイルで描かれている。

あなたの——灰色の 私の——クロテンの毛皮が
何と楽しげに雪片で輝いていたことか
クリスマスの市で私たちが誰よりも輝いて
リボンを探し回ったことか
(中略)

人々が散っていった頃
いかに私たちが心ならずも大聖堂に入っていったか
いにしへの聖母マリアに
いかに私たちがまなざしを止めたことか

暗い目をしたその顔が
何と穏やかで疲れ切っていたことか
エリザヴェータの時代の
丸々としたキューピッドのついた聖像入れの中で

いかにあなたが「私はこの手が欲しい！」と言い
私の手に触れずじまだったことか
どんなに慎重に
燭台に——黄色い蠟燭を置いたことか……

——おお オパール指輪をはめた
優雅な手！ ——おお 私の不幸のすべて！ ——
いかに私があなたに約束したことか
今晚アイコンを盗み出すと！

修道院の旅籠へ
——鐘のうなりと日没——
*名の日の女のように幸福な

私たちがいかに兵士の軍のように叫び始めたことか

(中略)

いかにあなたが私の頭を押えつけたか

巻き毛を一つ一つ愛撫しながら

あなたの七宝のプローチの

花が私の唇を冷たくした

いかに私がああなたの細い指を

けだるい頬で撫でたことか

どんなにあなたが私を坊やと呼んでからかい

そんなあなたが私を気に入っていたことか……

*「名の日」とは、自分の名と同じ聖人の記念日のことであり、盛大にその日を祝う習慣があった。

1914年の12月末、ツヴェターエフとバルノークはクリスマス祭を見るために古都ロストフを訪れ、その修道院の宿泊所で肉体的な関係を結んだとされている⁽⁷⁾。二人の肉体的な接触は、第10篇で言及されている「握手」をのぞけば、この詩に限られている。この詩の設定——クリスマスに、大聖堂で「あなた」が「私」の「手」に対する欲望を口にし、修道院の旅籠へ歓喜の叫びを上げる——は、父権制的なキリスト教に真向から立ち向っている（そもそもマリアには言及しているが、キリストには一言も触れていない）と解釈することもできるが、女性間の愛を容認していた初期キリスト教⁽⁸⁾をも想起させる。また、性行為のほのめかしは、「女友だち」という物語のプロット構成において欠かせないものであった。第7篇は「女友だち」のほぼ中間に当たっている。性行為は、ある種のクライマックスなのである。さらに言えば、これほど重要と目された性行為の暗示は、いわゆる「ロマンティックな友情」とは一線を画するためにも不可欠なものなのであった。近代社会初期には、女の絆を「ロマンティックな友情」の名で脱性化して骨抜きにしながら、容認していた⁽⁹⁾。第7篇で暗示されている女性間の性行為は、このような「ロマンティックな友情」という幻想に現実を突きつけている。最終聯の二行「どんなにあなたが私を坊やと呼んでからかい／そんなあなたが私を気に入っていたことか……」には異性愛的介入が感じられるが、この解釈については、後でバルノークの描写と合わせて論じたいと思う。

第9篇と第10篇では、時間がさかのぼり、二人の出会いの場面が回想されている。

ここでは、凄まじいまでの一目惚れが描かれている。第9篇の一部を引用しよう。

あなたは自分の愛する者を通り過ぎる
私はあなたの手に触れない
だが あなたが私にとって——最初に出会った人というには
私の中の愁いは——あまりにも絶え間ない

心がすぐに言った 「愛する人！」
あなたのすべてを——運まかせに——私は許した
何も知らないまま——名前さえ！——
おお 私を愛して おお 私を愛して！

(中略)

私はあなたのすべてを痛いほど愛する——
あなたが美しい女でないということさえも！

この詩における一目惚れは、決して相手の容姿の美しさによるものではない。「あなたが美しい女でないということさえも！」の一文は、女性の美を崇め続けてきた恋愛詩のコンヴェンションを覆す。のみならず、女性の美醜に現在までこだわり続けている異性愛社会の価値観に対する痛烈な皮肉にもなっている。

この詩は次のように締めくくられる。

あらゆる薄笑いに詩で反撃しつつ
あなたの中で私たちのために用意されたすべてを
私はあなたと世界に明らかにする
ベートーヴェンの額をした未知の女！

「あらゆる薄笑い」と、ここで初めてツヴェターエワは自分を取り巻く社会からの迫害に触れている。それに対して、ツヴェターエワは詩によって、つまり言説によって対抗しようとする意志が表明されている。

ここで、ツヴェターエワの言葉の筆によるバルノークの身体の描写について触れておきたい。「女友だち」の中で、ツヴェターエワは、バルノークの髪、額、眉、唇、手、指を幾度となく描写している。その箇所を引用してみよう。「額の高い悪魔」(第1篇)、「おお オパール指輪をはめた／優雅な手！」(第7篇)、「弓なりのくすんだ唇は／気まぐれで弱々しい／だが突き出たベートーヴェンの／額は目もく

らむばかり」「皮鞭の似合う手」「弓にふさわしい手が／絹に隠れ／唯一無二の手／美しい手」(第8篇)、「あなたの弓なりの唇を／その一段と増した傲慢さを／重々しい眉の張り出しを私は見る」「ベートーヴェンの額をした未知の女！」(第9篇)、「そして重たげな赤い兜の下の／権力欲に満ちたあなたの額」(第10篇)、「あなたの威圧的な／この手を愛していたと」(第13篇)、「そして踊る炎のようなまなざしがある……／濡れた深い口角の／暗く歪んだ口がある」(第14篇)。コリーン・レイモスはカールソン・ウェイドの著作を取り上げて、そこにおける「男役の攻撃的なレズビアン」の型にはまった描写を細かく引用している⁽¹⁰⁾。もちろん「女友だち」におけるパルノークの容貌は、ウェイドの描写に代表されるようなステレオタイプに当てはまるものではない。ここで論じたいのはそのようなことではなく、ツヴェターエワによるパルノークの描写がもたらす同性愛関係と異性愛関係との亀裂なのである。パルノークの手が「唯一無二の」「美しい手」とされているのは、彼女の文学的創造力を暗示しているとも考えられるだろう。しかし、パルノークの髪は「兜」にたとえられ、その下にある額は、二度も「ベートーヴェンの」と形容されている。「ベートーヴェン」という男性が持ち出されていること、あるいは「傲慢さ」「権力欲」といった「男性的な」属性がちりばめられながら、しかし実際の男性は介入していないことが、異性愛を根底から覆す。さらに、「どんなにあなたが私を坊やと呼んでからかい／そんなあなたが私を気に入っていたことか……」(第7篇)であるとか、「『おお 私のオレステースになって』／そして私はあなたに花を贈った」(第10篇)(傍点強調はいずれも筆者)は、明らかにレズビアニズムに対する異性愛的介入なのである。しかし、実際の男性はこの連作詩から徹底的に排除されている。「男性的な」ものが女性によって十分に満たされ、補われていること、このことこそがレズビニズムが異性愛に加える最大の打撃であるかもしれない。仮にこのような関係を「男役／女役」に当てはめようとも、男性によっては満たされない欲望が、「女友だち」において露呈していることは事実なのである。

II バイセクシュアリティと「家族」

「女友だち」で隠蔽されている事柄についても触れなくてはなるまい。ここで隠蔽されているのは、ツヴェターエワが男性と結婚していること、そして夫との間に娘を生んでいることである。つまり、テキストの裏に抑圧されているものは、ツヴェターエワのバイセクシュアリティと一夫一婦制を基本とする家族ということになる。

ツヴェターエワは、義姉にあてた手紙の中では、夫セルゲイ・エフローンとパルノークとの間で揺れ動く心の葛藤を書き連ねている。だが、「女友だち」では第5篇で、女同士の三角関係——パルノークが自分以外の女性の恋人と一緒にいること

を見てしまった時の悲しみがテーマとなっているにもかかわらず、自分自身の夫との関係についてはまったく触れていない。このことは、作品全体を通して言えることで、ツヴェターエワが自伝的色彩の強いこの作品を「レズビアン物語（フィクション）」として構築していたことの証左にはなっている。

ツヴェターエワが抑圧してしまったバイセクシュアリティは、しかし、このテキストの読みに少なからず影響を与えている。まず、このテキストにおける徹底した男性排除の姿勢から「男性嫌悪」という用語を引き出したが、これはミソジニーの完璧な裏返しではないかということである。男性は女性を嫌悪しつつも、その一方でホモセクシュアリティを嫌悪するあまり女性と結婚する。ツヴェターエワは男性と結婚しているにもかかわらず、女性同士の絆を賛美し、男性を必要としないセクシュアリティを言説化する。ツヴェターエワのテキストこそ、まさにミソジニーの裏返しなのである。そして、ミソジニーの逆があり得ることを知らしめるのは、テキストの背後にあるツヴェターエワのバイセクシュアリティなのである。「女友だち」で示される「男性嫌悪」は、ミソジニーと同様に近代社会の中心を成すものであるかもしれないのだ。

「女友だち」において隠蔽されているもう一つのもの——「家族」はいかなる意味を持つのだろうか。フーコーによれば、18世紀以降、性的欲望はその開花の特権的な点を家族に置くようになった⁽¹¹⁾。異性愛はまさにこのような家族制度によって強化されたのであるが、家族を持ちつつも女性に対する愛を歌ったツヴェターエワは、ごくあっさりこのイデオロギーを乗り越えてしまったのである。

バイセクシュアリティは、異性愛者からも同性愛者からも疎外され、最も周縁に追いやられたセクシュアリティである。マジョリー・ガーバーはその著書の中で、バイ（セクシュアリティ）は、異性愛—同性愛という区分の中間にあるのではなく、その向こうにあるものであるとしている。さらに、セクシュアリティは固定的なものではなく、流動的なものであり、バイセクシュアリティの性的な発見は、セクシュアリティが成長の過程、変容であることを示すと述べている⁽¹²⁾。これに対して、「女友だち」は、バイセクシュアリティを切り捨てることによってレズビアン・セクシュアリティを固定化してしまっていると批判することもできるだろう。だが、このテキストの背後に隠されたバイセクシュアリティを考え合わせることによって、テキストの外で、ツヴェターエワのバイセクシュアリティが近代イデオロギーをいかにずらしているかを論証することが可能になるのである。

III レズビアニズムと母—娘関係

「女友だち」の第4篇で、ツヴェターエワは自分の若さとバルノークの「古い」

とを次のように対比させている。「——そしてあなたの来たるべき一時一時が／私の陽気さで若々しいものとなるはずなのに」、「——私はあなたの青春だった／それは通り過ぎていく」。ツヴェターエワとバルノークの年齢差が7歳であったことを考えると、ここでは年齢差が必要以上に強調されているように思われる。実は、このことは後にバルノークと自分との関係を母-娘の関係に重ね合わせていく、その布石となっているのである。1916年にツヴェターエワが書いたバルノークとの別離の詩の前半部分を引用してみよう。

いにしえの日々 あなたは私にとって母のようだった
夜にあなたを呼び出すこともできた
熱に浮かされた光 不眠の光
いにしえの夜の私の瞳の光

恵みの人よ 思い出して
日の沈むことのないいにしえの日々を
母の そして娘の
日の沈むことのない 日の暮れることのない日々を⁽¹³⁾

この詩が書かれた時点で、すでに長女アリアドナの母親であったツヴェターエワは、レズビアンとしては娘であった。「女友だち」では、バルノークは異性装こそしていないものの、つねに「男性的」なイメージをまとい、二人の関係を支配しているように描かれている。ここに従来の「男役／女役」の関係を当てはめてしまうこともできるだろう。しかし、ツヴェターエワは「男役／女役」を「母-娘」に読み換えたのである。

言うまでもなく、ツヴェターエワとバルノークは実際の「母-娘」ではないのだから、「男役／女役」と同様に、ある役割を演じていることに変わりはない。だが、レズビアニズムに導入されたこの新たな役割分担は、「男役／女役」といった異性愛関係とパラレルな役割分担をふたたび同性間の関係に投じることによって、複雑さを増し、性的な母親——母親のセクシュアリティや、娘に対する母親の支配といったものを露呈する。もちろん、この「母親」も分担される役割にすぎないのであるが、これも母親の一つの表象であることは間違いないし、母-娘関係を再考するきっかけとなるだろう。

結 語

最後に、ロシア文学の流れにおける「女友だち」の位置について、簡単に触れておきたい。バージンはジノヴィエワ・アンニバルの小説などを例に挙げ、銀の時代末期の文学や批評においては、その初期と同様に、レズビアンはグロテスクで、エキゾチックな、「外国の」半陰陽者のままであったと述べている。さらに、ジノヴィエワ・アンニバル、アンネンスキイ、イヴァーノフ、ホグセヴィチらが、彼らが暗黙のうちに肯定していたレズビアニズムの世紀末的な見方に対する否定的で敵対的な面に気づいていないようであることを指摘している⁽¹⁴⁾。「女友だち」においても、ツヴェターエワが自らのバイセクシュアリティを抑圧したことによって、レズビアニズムを固定化する危険があることはすでに指摘した。しかし、過剰とも言えるほどレズビアニズムを歌う詩と日記的、独白的な詩とを交互に配置することによって、ツヴェターエワはその危険を回避しようとしている。男性を徹底的に排除することによって、レズビアニズムが女性同士の「異質の」愛であることを強調しようとする反面、従来の独白的な恋愛詩の形式にのっとりて語ることによって、異性愛関係と同様の事態——闘争としての恋愛関係、恋愛主体としての心の葛藤、別離の悲しみ——などが、同性愛関係の内部にも生じることを明らかにしている。そのような意味で「女友だち」は、どうしてもレズビアン^{レズビアン}の怪物性、あるいは逆に神話的なレズビアンを虚構しがちであった他の文学作品とは一線を画している。

「女友だち」以降、ツヴェターエワは1932年に「アマゾンへの手紙」と題するエッセーを書き、レズビアニズムについて論じているが、このエッセーについてはまた機会を改めて論じることにしたい。

註

本稿で用いた「女友だち」のテキストは次のものである。

Марина Цветаева, Собрание сочинений в семи томах т.1.(Москва : Эллис Лак, 1994) с.с. 216-228.

- (1) Diana Lewis Burgin, “Laid Out in Lavender,” in Jane T. Costlow et al. (ed.), *Sexuality and the Body in Russian Culture* (Stanford: Stanford University Press, 1993) p. 181, p. 193.
- (2) Judith Butler, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity* (New York and London: Routledge, 1990) 第3章iv参照。
- (3) Leigh Gilmore, *Autobiographics: A Feminist Theory of Women's Self-*

- Representation* (Ithaca and London: Cornell University Press, 1994) p. 223.
- (4) 大橋洋—「ご主人を拝借——ファグ・ハグとクィア理論」『ユリイカ』(青土社、1996年11月号) pp. 120-121.
- (5) Laura Engelstein, “Lesbian Vignettes: A Russian Triptych from the 1890s,” *Signs: Journal of Women in Culture and Society*, 15, no.4 (Summer, 1990) p. 815.
- (6) 大橋、p. 122.
- (7) サイモン・カーリンスキー 『知られざるマリーナ・ツヴェターエワ』 亀山郁夫訳 (晶文社、1992) p. 78.
- (8) Bernadette J. Brooten, *Love between Women: Early Christian Responses to Female Homoeroticism* (Chicago and London: The University of Chicago Press, 1996) p. 1.
- (9) 竹村和子 「『ロマンティックな友情』からセクソロジー前夜まで」『英語青年』第142巻4号 (研究社出版、1996年7月) p. 13.
- (10) Colleen Lamos, “The Postmodern Lesbian Position: On Our Backs,” in Laura Doan (ed.), *The Lesbian Postmodern* (New York: Columbia University Press, 1994) p. 92.
- (11) ミシェル・フーコー 『性の歴史 I 知への意志』 渡辺守章訳 (新潮社、1986) p. 139.
- (12) Marjorie Garber, *Vice Versa: Bisexuality and the Eroticism of Everyday Life* (New York: Simon & Schuster, 1995) pp. 65-66.
- (13) Ц в е т а е в а , с с . 300-301.
- (14) Burgin, p. 202.